

同関協 だより

第 48 号



伊和神社秋季大祭 御旅所の神事

* 第 48 号 主な内容 *

□ 現地研修報告

「取り残された部落」

「今も続く祭礼差別」-----3～6

「フィールドワーク」-----7～8

□ 気になる一冊

「コリアン部落」-----9

□ 同関協がゆく - 特別連載 -

「解放運動再興への祈り」--10～11

□ 会長コラム

「同関協道」-----12

私たちは、

教団内外における部落差別の克服を願いとし

差別に苦しむものが一人でもいる限り

その差別からの解放を自らの課題とする

「同関協」 規程前文

2012 年度「同関協」現地研修会 in 宍粟市 「取り残された部落」と「祭礼差別」

2012 年 10 月 15 日～16 日



二〇一二年十月十五日から十六日にかけて、同関協の二〇一二年現地研修会が、兵庫県宍粟市にて「取り残された部落」というテーマのもと開催されました。

十五日は、部落解放同盟宍粟市支部連絡協議会書記長の大久保陽一氏の案内で宍粟市千種町のフィールドワークを行い、フォレストステーション波賀にて同氏から「宍粟市の被差別部落の実態」について講義をいただきました。

翌十六日は、元朝日新聞記者の平野次郎氏から「伊和神社を中心とした祭礼差別について」の講義をいただき、実際に秋季大祭が行われている「播磨一の宮」と呼ばれる伊和神社に足を運び祭の様子を見学しました。

毎年、「教団内外における部落差別の克服を願いとし、差別に苦しみものが一人でもいる限り、その差別からの解放を自らの課題とする」ことを目的に開催されている同関協の現地研修会。

今年度も、現地に身を運び、その地の厳しい実状を知るとともに現地関係者との交流を行い、情報と意見の交換の場を持ち得たことは、ともに連携を保ち、課題の共有をはかる上で貴重な場と時間になりました。

二〇一二年度 同関協現地研修（兵庫県宍粟市）

今も続く祭礼からの排除

「伊和神社に見る巧妙な差別」

フリーライター 平野次郎氏

市広報が投じた波紋

兵庫県西部にある宍粟市の広報「しろう」（二〇〇九年十一月号）に、「伊和の秋燃ゆ」のタイトルで伊和神社の秋祭りを紹介する記事が載った。

△揖保川河川敷の御旅所で神事を済ませた氏子屋台四台が、次々と伊和神社の境内に戻り、A地区の屋台一台が加わった本宮の練り合わせが幕を開けた。「エーンヤー、エーンヤー」太鼓の音とともに威勢のいい掛け声が響き、B地区の屋台が勇ましく境内の中央を練る。続いてC地区、D地区、E地区、A地区の順で境内へ。▽（地区名はいずれも実名）

記事は最高潮を迎えた屋台の練り合わせを描写し、A地区出身の二人に祭りに参加できた喜びを実名で語らせている。この記事を読むと、どこにでもある秋祭りの風景のように思える。ところがA地区が被差別部落であることから、A地区が神事が済んだ後に参加していることやA地区の出身者名を載せていることに對し、疑問の声が出た。

部落解放運動にかかわる人たちが市長あてに出した申入書は、「なぜ

神事にA地区が入れないことまであえて記述するのか」「偏見をあおる内容となっている」と指摘。地区出身者の実名で出ていることに對し、「あまりにも無警戒で人権に対する配慮のかけらもない」と批判している。これに對し市は「偏見をあおる」「A地区の特殊性を強調する」「A地区の出身を明かす」との編集意図はありません」と回答。A地区が神事に参加していないことを記述した点については答えていない。

翌年一月、部落解放同盟や支援者らと市長らとの「行政懇談会」が開かれた。「この記事で傷ついた人がいる責任をどうとるのか」などの追及に對し、市幹部は「事実の流れに沿って書いただけ」との主張を繰り返し、最後に副市長が「広報の記事を問題でないと思っている人もいる」「配慮に欠けていたとは思わない」と発言。参加者の多くは怒りを抑えることができず、教師の一人は「広報の記事で傷ついた人がいるというのに、行政側の誰もが差別だと気づかなかったことは大きな問題だ」と批判した。

広報の記事はどこが問題なのか。事情を知らない人が読んだら、そのまま読み過ごしてしまうかもしれない。しかし、被差別部落であるA地区が氏子から排除された歴史があり、ようやく二〇〇〇年から祭りに参加できるようになった事情を知っている人なら、この広報の記事が差別を容認し助長するものだと思うだろう。

祭礼排除はいつからか

伊和神社は「播磨一宮」の名で知られ、祭神として大己貴神（おおむちのかみ）、別名大国主神（おおくにぬしのかみ）を祭る。古代播磨で広く活躍した伊和氏が信奉した神として伊和大神の名で呼ばれ

たこともある。平安末期の文献に「播磨国一宮伊和社」とあり、一國の最上位の神社だったことを示している。

A 地区の成り立ちについても見ておこう。宍粟市合併前の旧一宮町の『一宮町史』によると、江戸初期に A 村など五村（市広報の伊和神社秋祭りの記事に出てくる A ～ E 地区）が神戸郷を形成。郷村の村切り（分村）が進むなかで、A 村は一六六三（寛文三）年に分村した。だが、神戸皮多村として差別されていた A 村は他の四村と対等な関係ではなく、神戸郷（本村）に従属する枝郷（枝村）としての位置づけだった。

現在、A 地区は伊和神社の氏子ではない。『一宮町史』によると、江戸中期には他の四村とともに氏子だったらしく、一七七六（安永五）年に奉行所に出された文書によると、A 村が氏子であることを隣村の庄屋らが証言している。そのころ入会地をめぐる紛争が絶えず、A 村は入会地から排除されていくなかで氏子から排除されたらしい。

神事から排除されたのはいつか。同神社の祭りで御旅所への行列を先導する猿田彦の面が何かを語ってくれるかもしれない。猿田彦は記紀神話で天孫降臨の際に道案内したとされる神。天狗のような怪異なその面は、代々猿田彦の役を務める元一宮町長の佐伯仁さん宅に伝わる。いま使っている面とは別に、宝暦年間（一七五一～一六四年）に制作されたといわれる面を見せてもらった。面の裏側に「奉納 佐伯氏」と黒漆で書いてある。こ



伊和神社の秋季大祭 屋台の練り合わせ

れは佐伯家が神社に面を奉納したことを意味するのだろうか、その面がいまも佐伯家にあるということは、何かの理由で神社から佐伯家に返還されたことになる。

祭りの行列の進路を清める先導役を猿田彦が務める例は、全国の神社で見られる。いずれもかつては神社の下級職だった被差別民たちが担っていた。伊和神社でも A 村が猿田彦を務めていたが、何かの理由で神事から排除され、その後は佐伯家が猿田彦を引き継いできたことになる。排除はいつのことか。面が制作されたという宝暦年間から少し下ったころ、氏子から排除されたのと同様に猿田彦の役とともに神事から排除されたと考えられる。

祭礼参加への道のり

A 地区には伊和神社と関係が深い A 神社がある。二〇〇〇年に揖保川改修工事に伴って現在地に新築された。祭神は伊和神社と同じ大己貴神で、例祭も同じ一〇月一六日。『一宮町史』によると、A 神社の前身は江戸後期に A 村が伊和神社の氏子から排除されたあと、伊和神社の大己貴神を分祀して建てられたらしい。ということは A 地区の人たちは A 神社の氏子として二〇〇年余を過ごしてきたことになる。だがこの間ずっと、伊和神社の氏子に戻りたいという願いとともに祭りに復帰したいという願いが募っていた。

A地区が伊和神社の秋祭りに参加する発端となったのは、一九九三年に地区消防団の若者たちが地区総代（自治会長）に出した「伊和神社統合に関する決議を求める請願」だ。A神社を伊和神社と統合することを願い、屋台を購入して祭りに参加していくことを提案している。請願は決議されないうまま総代預かりになった。このため若者たちは「祭りを考える会」を発足させ、盆踊りなど地区の行事に力を入れながら伊和神社の秋祭りへの参加を探った。事態が急

展開したのは一九九八年、揖保川改修工事に伴ってA神社の移転が決まり、移転補償によって祭りに参加するための屋台の購入に目途がついたからだ。

一方、伊和神社の祭りにA地区が参加することに対し、周辺地区の対応はどうだったのか。当時のC地区自治会長によると、A地区自治会長から事前に祭りに参加したいとの相談があり、他の三地区の意見を聞いた。だが、氏子でない地区に参加させることへの反発が強かった。C地区自治会長は御旅所の神事が終わった後の屋台練りに参加してもらう方向で話をまとめ、覚書の作成を進めた。だが、A地区が祭りに参加する前に自治会長を退いたので覚書の中身までは知らないという。

当時の他の自治会長に取材したところ、「祭りではなく練りに参加させる覚書だ」との返答だった。意味がよくわからないので伊和神社に問い合わせると、「練り」というのは祭りが終わった後に神様に喜んで



彦田猿の導先を行く行列

もらうための「神にぎわい」だという。つまりA地区は祭りが終わった後の余興には参加できるが、神事を含めた祭りそのものには参加できないことを意味する。そのことを確認するための覚書だったのではないか。

祭礼排除と復帰の歴史

全国的には、神社の祭礼から被差別民を排除する例は江戸中期から後期に多い。『人権の歴史―同和教育資料―

（上）』（兵庫県部落史編集委員会）が紹介している神戸市の生田神社の場合を見てみよう。一七三六（元文一）年、差別されていた二つの村が連名で奉行所に出した訴状によると、両村は生田大明神の氏子で昔から祭りの神輿（みこし）を担いできた。だが、神輿の新調を機に急に「けがれる」との理由で担がせないのは納得できないと訴えている。

祭礼排除の背景には、江戸中期になって幕藩体制が揺らぎ始め、幕府が経済統制だけでなく身分制度の引き締めを図ったことがある。一七二六（享保二）年からの享保の改革では、穢多（えた）由緒調べ、穢多年貢金納化などが続き、一七七八（安永七）年には穢多非人風俗取締令が出された。これは穢多や非人が百姓と同じ身なりをしたり町人と交際したりすることを禁じるものだった。さらに経済統制によって、被差別民と百姓への年貢の取り立てなど直接的な収奪を強化した。それにより両者の間で生活や生産に欠かせない入会権などをめぐる利害の

対立が激化し、被差別民側が入会権や氏子権などを奪われていくことになった。同じころ A 村も伊和神社の氏子や神事から排除されていった。

一方、明治維新になって一八七一年（明治四）年に出された解放令（賤民廃止令）を機に、各地で氏子への復帰や祭礼への参加を求める動きが高まった。被差別部落の人たちが封建的身分制からの解放を求め、人権意識を高めていったことによる。『人権の歴史―同和教育資料―（下）』から、神戸市の住吉神社の例を紹介する。被差別部落だった住吉村は氏子であるにもかかわらず祭りの神輿かつぎから排除されていたため、他村と同等の権利を求めて裁判に訴えた。一八八二年（明治一五）年の大審院判決は、原告住民にとって二審敗訴後の逆転勝訴となった。この年は同村の住民多数が自由党に入った年であり、差別撤廃と自由民権運動が結びついたことにより勝訴できたといわれている。

不可視化された差別

A 地区の近代は差別との闘いの歴史だった。『かわた村は大騒ぎ』（稲田耕一著）から主なものを紹介する。一八七一年（明治四）年、死牛馬自由処理令を機に A 村は死牛馬の処理引き受けを拒否しようとしたが、反発した周辺の村の農民たちは A 村を焼き打ちにしようとした。この事件は解放令に反対して被差別部落を襲撃した播但農民一揆の一環だったが、A 村での流血は避けられた。一九二四年（大正一三）年には村対抗相撲大会での差別発言を機に起きた乱闘で、A 村ばかりの青年一〇人足らずが逮捕され有罪になった。差別した側ではなく差別された側だけが裁かれた無念さは、A 地区の人たちの心の傷となって長く残った。

そして現代。二〇一二年一月一六日の伊和神社秋祭りで、神社近くの駐車場に青色の法被に締め込み姿の男たち数十人が屋台を囲んで手持ちぶさたにしていた。二〇〇九年の市広報が書いていたように、四台の屋台が御旅所での神事を終えて戻ってくるのを待っている A 地区の男たちだ。その周りを神社へ向かう祭り見物の人たちがぞろぞろと通り過ぎていく。多くは事情を知っているのか、当たり障りがないようにしている。駐車場の内と外とが見えない壁で隔てられているような奇妙な空間だった。

こうした光景がもう一〇年以上も続いている。それは、巧妙なバランスを保っているかのようだ。A 地区の人たちは祭りに参加していると思っっているし、他の四地区の人たちは祭りに参加させてあげていると思っっているからだ。市民の多くも A 地区が祭りに参加できてよかったと思っっている。ひょっとすると市当局も同様に考えてあのような広報を出したのかもしれない。

だがすでに見たように、A 地区の屋台は神事には参加しておらず、祭りが終わるのを待つて練り合わせに参加している。このことを確認しているとみられる覚書の存在については、地域の一部幹部しか知らない。覚書がある限り、A 地区が本当の意味で祭りに参加していることにはならないし、祭礼差別が無くなったとは言えないだろう。それなのに差別している側も差別されている側ともに差別がないと信じていることで、かろうじてバランスが保たれている。差別が不可視化されている。「差別ではないか」と、多くの人が現実を直視さえすればこのバランスは崩れるだろう。だがそのためには、地域の人たちの主体的な取り組みがないと真の解決にはならない。

2012 年度 同関協 現地研修

ファールボークレポート

(兵庫県宍粟市 伊和神社)



秋の澄みきった晴天の下、研修会場のフォレストステーション波賀を後にし、バスで山間を縫って小一時間程揺られて行くと、高い木立を携えた鎮守の杜が目前に現われた。ここは播磨国一宮・伊和神社。神社へと続く沿道は、赤・緑・黄・ピンク・青の五色の紙飾りで彩られ、祭に参加する五つの地区を表わしてしているようだ。午前中の講義を思い返しつつ境内へと歩を進めると、参道には様々な屋台が出店し祭に賑わいを添えている。その中を平日の昼間にも関わらず、多くの子供達が楽しげに駆け回っている。町全体の祭として、学校も臨時休校になっているのだろうか。さらに奥へと進むと、威勢のいい掛け声が聞こえてくる。深い木々に囲まれた参道を抜けると、拝殿前の大きな広場には既に多くの見物客が詰

め掛け、その中をきらびやかに飾り付けられた四台の山車屋台が、法被に禪・鉢巻姿の氏子に担がれ、右へ左へと入れ替りながら、自分達が主役とばかり勇壮な練りを披露している。赤・緑・黄・ピンクの法被を纏った氏子達が力の限り山車屋台を担ぐ中、青い法被を纏った氏子の姿はどこにもない。

しばらく迫力ある練りに見入っていると、隣にいた老人に六〇才位の男性が近づいてきて、「山車屋台はこれで全部ですか」と思惑を含んだ質問をしてきた。すると老人は、「本当は五台あるんや、A地区は祭には参加せんや」と淡々と答え、その後もA地区の山車屋台について話されていた。そのやり取りを耳にして、改めてこの地での祭礼差別に対する問題意識の低さを実感した。一時間余りに及ぶ勇壮な練りが





終ると、少し小ぶりの神輿を先頭に長蛇の列を成して、四台の山車屋台が御旅所へと渡っていった。

道を挟んで神社の向いの道の駅へ移動してしばらく待っていると、太鼓の音と共に一台の山車屋台が現われた。青い法被の氏子達に引かれたA地区の山車屋台は、先程の四台の山車と比べても何ら遜色なく、大変

立派なものである。まばらな拍手に出迎えられた氏子達の表情は、相当長い距離を歩いてきたのか、どこか疲れた様子で、先程の行列と比べれば寂しい印象を受ける。道の駅の駐車場に到着すると、しばらく休息をとった後、集った見物客に囲まれて、威勢のいい掛け声と共に、たった一台だけの練りが始った。

見物客の中のどれだけの人が、この光景に疑問を持っているだろうか。あらかじめ事情を聞いていなければ、何の疑問も問題意識も芽生えていないかもしれない。一見何の問題もなく見える事象も、よく目を凝らして見てみれば、そこに人間の思惑や差別性が潜んでいる。問題を見えなくしているのは、誰かが作った常識や規範を隷属的に受け入れ、自身の利害以外には無関心な我々の生き方であり、こうした我々の生き方が結果的に差別を許容し、差別からの解放を妨げているのだろう。目に見えない差別という壁を打ち壊すための最初の一步として、潜在化した差別に目を向け、差別を直視していくことが大切だとあらためて気付かされた。

(編集委員 谷内正孝)



気になる一冊

最近、見かけなくなったものの一つに、葬列を組み墓地へ進んでゆく光景がある。時代の変化により、土葬よりも火葬が主流になり、自宅ではなくホールで葬儀が行われるようになったことが大きいかもしれない。私が葬列を最後に見たのは九年前の父親の葬儀だった。

私の実家の地域では葬列の棺を担ぐ者を「はくちよう」と呼ぶ。白装束に素足で草鞋を履いて棺を担ぐ。てつきり、その姿が真っ白なので「白鳥」を意味するのだと幼い頃から思い込んでいた。

高校生の頃、隆慶一郎の『吉原御免状』を初めて読んだ。その時は、単純に面白い作品だと思っていたのだが、社会人になり、改めて読み直すとその中に「白丁」という言葉が出ているのに気付いた。「白丁」という身分を知った時、葬列において「はくちよう」と呼ばれる人々は、ひよっとすると差別された身分の人のする仕事ではなかっただろうか考える。本来の白丁の担った仕事とは違うが、「穢れ」を扱う者として差別された人々としてのつながりがあるのではないだろうか。

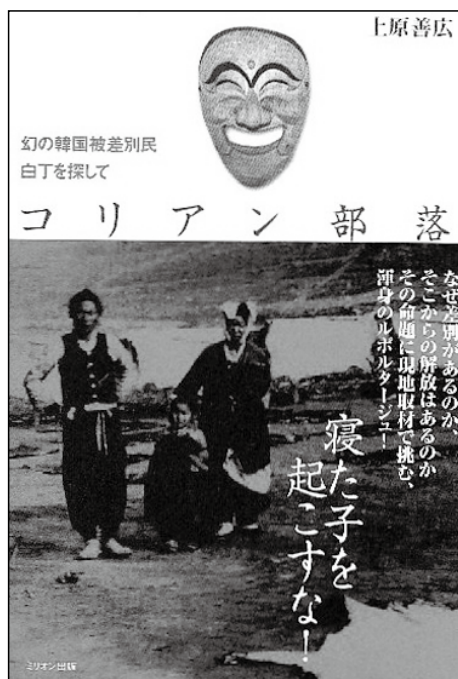
白丁とは朝鮮半島において差別された身分の人のことであり、「はくちよう」あるいは「ペクチョン」と呼ばれる。日本のように解放運動が大々的に行われた時代もあったが、現在では「寝た子を

起こすな」と隠された状況になっている。その一方で、ドラマ『チャングムの誓い』や演劇の中でも「白丁」として何の問題も無く、当り前の存在として登場する。日本ではドラマや演劇で被差別民衆が取り上げられることは少ない。

演芸において当り前のように登場しているが、それによって差別が解消されたのではない。今もなお、日本と同じように食肉を扱う者に対する差別、つまり職業差別、またそれに伴う結婚差別など、様々な問題が残っている。

この本には日本の差別との相違、差別に対する意識の違いが書かれている。単に、身近な隣国の差別と見るのではなく、差別の生まれる根底にある問題を問いながら、如何に解放へとつなげてゆくのかを考える一視点になるのではないだろうか。

(編集委員 吉田剛)



『コリアン部落』

- 幻の韓国被差別民「白丁」を探して -
上原善広 著／ミリオン出版

同関協だより

同関協の会員として知ったこと、目にしたこと、聞いたこと、感じる事など、思うまま表現していく編集委員の連載企画。

vol. 7-3

特別連載 「解放精神再興への祈り」(全三回)

京都教務所で開催された二〇一一年度「同関協」総会で、元宗務総長の本越樹氏に「解放精神再興への祈り」と題した講演をいただきました。全三回の抄録の今回が最終回です。(文責 編集委員)

「宗門の危機」

名古屋別院を会場にして訓覇信雄元総長の十三回忌法要があり、高史明先生と私と水島見一さんの三人が話をしました。

その時の控室で兄玉曉洋さんが「全国教団問題協議会をやって、この教団をどうするかって論議をして、最後に宗憲改正ができた」。そして、「あの一言で宗憲と宗門の体制が変わった、あの一言が大事なんだ、『同朋社会の顕現』。あそこへ至ることが出来た。あれに極まるだろう」といわれた。そこで、それはそうだが「言い切ったのはいいかど言葉だけで止まってしまったのではないか。『同朋社会の顕現』と言っただけで止まってしまったんじゃないか」と申し上げた。なるほど宗門ではこのままの体制では駄目だと、そんな会話でした。

寺格・堂班廃止。これも差別糾弾から出てきました。寺格・堂班を廃止するというのは、お寺が全部並列になるだけ。でも寺格・堂班一つが外せない。なぜかという募財体制と絡むから。全部割当に絡ん

でくる、衣の色と絡んでくる。堂班というのは単なる出仕の座位だけではなく、「位」ですから身分が違うという話です。

歴代内局で何回も委員会を作りました。寺格に関する委員会は嶺藤内局でも委員長が二回か三回変わりましたができないのです。古賀内局のときに私が委員長になった。その時に董理院董理差別事件(一九八四)があつて鳥取県で糾弾会が開かれた。その時に同和推進本部長をしてもらった人が参務として出席されて宗門の体質を追求された。寺格・堂班をどう思っているのだと問われたときに、「寺格・堂班は差別であります」と言い切った。言い切ったら「差別や」と、「差別教団やないか」と。言い切った限りはやめなければならん、差別教団のままでシャットとしておれないということで古賀内局の時、大谷大学の柏原祐泉という先生が寺格・堂班廃止の中心人物として頑張ったのです。寺格・堂班をやめなきゃいかん、と。

教団問題の時に六年間辛抱した嶺藤亮元宗務総長は、「寺格・堂班はもとよりやめなければならぬが、本当に問題なのは僧位僧綱だ」といいます。「教師」です。今でもやっているでしょう僧都でございませうとか大僧都でございませうとか、あれをやめなければいかんって言われました。嶺藤さんは黒衣同盟ではないですが、黒衣と墨袈裟で報恩講をお参りする、一座でもいいからそういうお参りがしたいと言っておられました。

当時の本部長の発言というものを足がかりに見切り発車しようと言いつつ切ったのは、山陽教区の後藤さん。いつまでも募財に絡んでいるから駄目だとか、儀式に絡んでいるから変えにくいとかでは駄目だ。「まずやめよう」といつて寺格・堂班をやめるところへいったんです。見切り発車で発車した。

その時の古賀内局に対する答申書は相談して書きました。書いたのは泉恵機さん。その中には残った問題が全部書いてあります。女性

差別の問題も書いてあります。まだまだ問題は残っていますよ、と。これを廃止するだけではなく、これからは残っている問題に取り組んでいくということを付して答申書に出した。この答申書を読んだら全部入っています。

だけど先の、「同朋社会の顕現と言っただけで、言葉だけで止まっている」というのはこのことです。これなのです。

安居のもち方も変わったし、お斎の儀礼など、さすがにかつてのような封建制はなくなりました。今のご門主は自分で「御仏飯」をあげられます。これは宗憲に、「聞法者、末寺住職・門徒の先頭に立って聞法する人」と規定してあるとおり、親鸞精神です。御同朋・御同行ですよ。親鸞聖人が「弟子一人も持たず」というのは、蓮如さんが「かしくきておおせられけり」というけど、へりくだるのとは違う。親鸞は僧にあらず俗にあらず仏弟子だ、と。如来本願の機である。あなたも私も本願の機である。一緒でしょう。部落大衆はそれに感動しているんですよ、立ち上がったんですよ、親鸞という人は我々に同じところに立って一声称えたらクビが飛ぶような中を念仏やと、この親鸞も念仏やと、こうおっしゃって下さっている。その精神ですよ。それが水平社創立の精神だと。

解放新聞の「荊冠旗」に、水平社創立以来の解放精神が風化している、その危機感が解放運動の中にある。解放運動はどこへ帰っていかないといけないのか、と危機感を持っている人が多い。今の組坂委員長がいろいろと対談されて本が出ています。解放運動を振り返って自分自身を正すときだと、そういうところに立っている。我々はどうですか。御遠忌は終わったけど暢気ではないですか。ここに親鸞おらんといわれ続けているにも関わらず、親鸞回復しようという精神に立っておりますか。

私は年寄りだから引退しておりますけど、このごろ呼ばれては、そ

もそも同朋会運動とは何かと聞かれると、同朋会運動ということで立ち上がったその根源は、このままではあかん、このままでは社会に対して、はい、これが親鸞聖人でございませうといえない。これが親鸞精神でございませうといえない。言ってもとおらない、社会が信頼しない。坊さんが何言っても坊さんの言うことを聞かんですよ、このままでは。それでどうして親鸞教団に帰るのか。そういう問題をもっていた。「真身会」、戦後の「真宗大谷派同和会」、そして「同和委員会」そこまで進んだやつが潰された。後の選挙で嶺藤内局（一九七四）になって元へ戻りました。さあこれからということで再出発するはずが、という中から「真身会」の流れを汲むこの「同関協」というものが生まれたのです。

朝野温知先生がおっしゃっておられるように、「同関協」というのは宗務所がつけた名前ではない、同和関係寺院協議会というのは我々が立ち上がるのだと、自ら名のつた、誇りを持って名のつた名前だということを忘れないでほしいといっておられます。自ら名のつた名のりだ。部落差別の問題というものをこの宗門の中心課題にしていくなということを我々が訴えかけていく、我々の名のりだ。これは「真身会」の流れです。そういう「真身会」の流れを汲んでおられる人たちも立ち上がっていかないといかん。部落解放運動も危機だと感じ取っているその運動家がいる。我々の中からも宗門の危機だと、危機を感じ取って立ち上がってこういう人たちが出てこないといかんということ 생각합니다。

そういうつもりで今日は「解放精神再興への祈り」、これは単に私の祈りではない。武内了温とか、朝野温知とか、橘了法とかのたくさんの人たちが祈っておられる、祈りである。願いたいものではない「祈り」です。非常に強い言葉です。そのことをお伝えして、今日はご勘弁いただいて、お話は終わりたいと思います。（おわり）

同関協道

はじめて、我が教団が差別教団であると知らされてから、やがて半世紀近くになる中で、八回の糾弾から何を学び、何に取り組んできたのか。

一九七八年発行された『仏の名のもとに』のときの宗務総長の刊行の言葉に「宗門の同和運動推進の基本姿勢は、同朋会運動が同和推進の母体となり、同朋会運動と並列するものではありません。同朋会運動が同和運動の推進がまた同時に、同朋会運動の正しさの証となるものであります」とあり、その証が「宗門自身の差別的体質の変革」であると述べられています。

あれから宗門は、度重なる差別事象を呈しながら、遅々たる歩みどころか、いまだでは、なぜいまだ部落差別問題なのかというような風潮が見られることも現実であります。

最近、北陸のある研修会に参加されていたご門徒の方からお聞きしたことがあります。

七十年ほど前の戦時中、近所に居住されていた在日コリアンのお家に、三つ折本尊を届けに行った。親鸞聖人の教えを、お念仏を頂いて欲しいという願いから、その後も真宗門徒として当然の行為として何の疑いもなくずっと思っていた。

しかし、ある縁があつて教区の「同和」研修を受講したとき、当たり前で当然としてきたことが、在日コリアンの方々の精神生活に土足で踏み入れてきた過ちを知らされた。以来、この宗門の研修は「私が気づかされ、私が解放されていく学びだと知らされました」と申されていました。教団も同様に差別教団と名告ったとき、差別したことへの痛みがあつたのか、あつたならば必ず歩みとなつたはずであります。

教団とは、わたしたち一人ひとりであります。

真宗大谷派同和関係寺院協議会会長 片山寛隆

会費納入のお願い

＊年会費 3,000 円＊

郵便振込口座番号

01010-6-2770

加入者名

同和関係寺院協議会

ご理解とご協力をお願いします

同関協だより 第48号

発行日 2013年5月31日

発行人 片山寛隆

発行 真宗大谷派宗務所
解放運動推進本部内
「同関協」事務局

〒600-8505

京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町

Tel 075-371-9247 Fax 075-371-9224

E-mail kaiho@higashihonganji.or.jp

編集後記

▶3回にわたる木越樹氏特別連載「解放精神再興への祈り」いかがでしたでしょうか。当時の東本願寺の様子的一端がおわかりいただけたのではないのでしょうか。1970年生まれの私にとっては、教団の歩んで来た歴史を確認できるとても貴重なお話しでした。部落差別が、今なお残る世の中は、個々の意識の問題でもあるだろうが、正しく歴史を学んで背景を知り自分自身のものにしていく事が大切なのではないのでしょうか ▶「取り残された部落」と「祭礼差別」では、現地に身を運び、部落差別の現実を目の当たりにしてきた。差別を差別と感ぜない意識が受け継がれている。差別意識の差は、現地研修に参加させていただいた時にそれぞれの村にあることを教わりましたが、その溝の深さに悲しいものを感じました。それぞれが、その場その場で差別と向き合い歴史背景を知り学んだ事を自分の言葉で広げていく事が大切だと思います ▶同関協総会が、7月17日に行われます。今回の総会は、しばらく実施されてこなかった内局懇談があります。同関協が直接宗門に話せる貴重な機会です。是非、繰合せご参加ください。(編集委員 高岡聖道)